

はお前なのさ、誇り高きフアラオよ。…」

「Child of the Morning」がアルバート小説賞を得たのは、当然のことであろう。とにかく、長い平原の冬を、ベッドの中で毛布にくるまりながら愛読するには、ぴったりの本である。

◇モテカイ・リックラー「The Apprenticeship of Duddy Kravitz (ダディ・クラビッツの徒弟時代)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九七四年刊。

「Son of a Smaller Hero (小英雄の息子)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九五五年刊。

「St. Urbain's Horseman (セント・アーベインの乗馬者)」バンタム、一九七二年刊。——モントリオールの古いユダヤ人地区の生活と外部の広い世界の生活を描いたもの。作者のリックラーは、おかしみと、ピリツとしたところのあるモラリストで、(他人の意見や考え方を)受け入れはするが承認はしないという面白い作家である。

◇ガブリエル・ロウ「Bonheur d'occasion (その場限りの幸せ)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九五九年刊。

「The Tin Flute (アリの笛)」(ハインナ・ジョセフソン英訳) マクレランド・アンド・スチュワート、一九六九年刊。——ケベックを覆っている緊張状態を概略理解するのにすぐれた小説。

◇ロジエ・ルマン「Au pied de la pente douce (なだらかな山の麓で)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九六

八年刊。「The Town Below (町の人たち)」(サミュエル・パトナム英訳) マクレランド・アンド・スチュワート、一九六一年刊。——ケベック市の労働者階級をいきいきと描き出した作品。

◇マーガレット・ローレンス「A Test of God (神の戯れ)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九七四年刊。(一九六六年刊の「Rachel, Rachel」と同じもの) ——中西部カナダの農村生活に充足を求める教師の話。映画にもなったが、小説の方がすぐれている。

◇ロッシユ・カリエ「La Guerre, yes sir, Éditions・デュ・ジュール、一九六八年刊。(シエイラ・フィッシュマンによる英訳本は一九七〇年にアナンシ社から) ——下層兵士のみだらな軍隊生活を描いたもの。

◇アライアン・ムア「Le Marquis D'enne」マクレランド・アンド・スチュワート、一九七六年刊。——オンタリオ州の小さな町からトロント、モントリオール、ニューヨークへと渡り歩き、夫を何度も変え、現実から新たな現実を求めるうちに自己を見失い、最後に混乱に至る三十三歳の女の絶望の一日を描く。

◇ロバートソン・デービス「The Business (五番目の職業)」、「The Manticore」、「World of Wonders (不思議の世界)」マクミラン、一九七〇—一九七五年刊。——現代の最も偉大な三部作である。二〇世紀の英語系カナダについて知る必要

のある全てが描かれている。どこをとってみても、おそらく読者が知らねばならないことばかりだといえよう。作者のデービス氏はカナダのデイケンズともいえる作家で、あたかも父なる神がその世界では根本的なものでありながら目には見えないのと同じように、デービスも彼の創造した世界の中では普遍的かつ目に見えない存在となっている。



◇ヒュー・マクレナン「二つの孤独」マクミラン、一九六八年刊(初版は一九四五年)。——一九一四年から一九三九年のフランス語系カナダと英語系カナダの関係を描いた作品で、この問題を扱った古典的小説。

◇マーガレット・アトウッド「Surfacing (浮上)」ペーパージャック、一九七三年刊。——ケベック州北部の遠い湖の傍に住む、現状に不満な若いカナダ人の物語。最後にヒロインは、これ以上犠牲者であるのをやめようと決心し、「浮上」する。

◇シンクレア・ロス「As For Me and My House (私と私の家)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九七〇年刊(初版は一九四一年)。——自称芸術家の牧師とその妻が、平原と風と土埃と孤絶と牧

師の仕事と、町とそして自分自身にとらわれて日々を生きるという話。

◇ステファン・リーコック「Sunshine Sketches of a Little Town (小さな町の日向風景)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九四八年刊(初版は一九一二年)。——著者は米大陸が生んだ最も愉快な二人の思想家の一人。

#### ■エスキモ文学

◇ジェームス・ヒューストン「The White Days (白い夜明け)」ハーコート・ブリース・ジョバンノビッチ社、一九七二年刊。——エスキモが初めて白人と接した頃の話にもとづいた小説。ヒューストン氏は、バフィン島で十二年間暮らし、原住民芸術家に版画作りを教えていた。

◇「We Don't Live in Snow Houses Now: Reflection of Arctic Bay (俺たちの家は雪の家じゃなくなった——北極湾の回想)」(ローグ・インヌクスクとスターザン・コーワンによるインタビュー) カナディアン・アークティック・プロデュサー社(ハーティック)、一九七六年刊。——「昔は俺達は何時間も外で遊んだものだ。それでもちつともこごえるなんてことはなかった。ところが今じゃあ暖かい家に住んで、寒さに弱くなっちゃった。子どもらはもう外では遊ぶことができない。寒すぎて我慢できないんだ。俺達が若い頃は、肉だけを食って生きてきたものよ。あんた達も肉を食うと、体が丈夫になり、血もふえて暖かくなるだろう。」